



第203回くらしの植物苑観察会 2016年2月27日(土)

## -くらしの中に息づく植物-

天野 誠(千葉県立中央博物館 主任上席研究員)

### -樹種の違いによる木材の多彩な利用法-

日本では、木材の利用は、くらしの中で、大きな位置を占めていました。その利用は、主にエネルギーとしての利用と物を作る素材としての利用に分けられます。すでに薪や炭などのエネルギーとしての利用は、一部を除いてみられなくなりました。建材としての利用は未だに一定の役割を果たしていますが、使われるのは、ほぼ針葉樹に限られます。身の回りの道具としては、軽くて安価で、どんな形にも成形可能なプラスチックや丈夫さと加工の容易さが利点の金属に取って変わられて、以前に比べ、減ってしまいました。

器材としての木材は、各々の樹種のもつ特性に応じて、様々な用途に使い分けられていました。金属やプラスチックと異なり、均質でない木材の加工には手間が掛かります。木材は、加工後の狂い、割れ、収縮などの問題をはらんでいます。また、腐朽、虫損の恐れがあります。これらの欠点を克服し、それぞれの材の硬さ、加工しやすさ、入手のしやすさ、しなやかさ、重さ、取れる部材の大きさ、さらには色や模様の美しさから、木材の使い分けがされてきました。これらの特性は、主に通導組織(生きていた時は水分を運び、木材となった時は、一定程度、空気に満たされています)の構造と強さを維持するためにそこに沈着した物質などによって決まってくる。

身の回りにある食器から木材を眺めてみましょう。箸は日常の食事に欠かせません。使い捨ての割り箸にも高級料理店で使われる吉野杉の利休箸から、コンビニの中国製の竹の割り箸まであります。普段使いの箸にも、素材が透けて見える紫檀や黒檀などの箸と様々な模様をつけた塗り箸があります。

お椀は、削り物（くりもの）細工の代表です。削り物は、木から丸い器を作り出す技法です。お椀の木地の材料には、ケヤキやミズメを使います。ろくろによって木材を丸く成形し、うるしを塗っては乾かし、研ぎを繰り返して、完成させていきます。

弁当箱に使われる「曲げわっぱ」は、曲げ物という技法で作られます。側面は、スギやヒノキのへぎ板（薄く削った柾目（まさめ）板）を煮て、型を当てて、一気に丸めます。丸めた後は、サクラの樹皮でつなぎ目を留めます。

家具も木製品の代表です。家具は主に、板を組み合わせた指し物という技法で作られます。家具の一種たんすは用途によって、使われる材質が異なります。着物を収納するのに使われるのは、桐のたんすです。キリは、柔らかくて加工しやすく、しかも軽いという特徴があります。外気の湿度に応じて、中を適切な湿度に保つ作用があります。たんすのもう1つの代表的な素材がケヤキです。ケヤキは、木地が堅牢で、木目が美しく、重厚な金具が付けられたたんすの表の材料になります。

材の色の特徴を模様としてうまく利用した箱根細工は、いまでもお土産用の秘密箱として健在です。箱の細工の模様は様々な色の小さな木材を貼り合わせて模様を作る所から始まります。それを薄く切って、箱に貼り付けます。箱は刻みを付けた材を組み合わせて作り、決まった順序に板を動かさないと開けることができません。

今回の観察会では、木材の多様性と用途について、今は失われかけている昔の人の知恵を紹介します。



箱根細工の秘密箱

.....  
**次回予告** 第204回くらしの植物苑観察会 2016年3月26日（土）

「桜から考える歴史」 小島 道裕（当館歴史研究系・教授）

13:30~15:30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要